2016年10月23日

福音書からのメッセージ

言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。
（ルカによる福音書18章14節）

今日のたとえの登場人物は、ファリサイ派の人と徴税人です。ファリサイ派は何度も聖書に出てきますが、たいてい悪いように描かれています。しかし当時の人々にとって、ファリサイ派の人々は尊敬に値する人であって悪い人とは見られていませんでした。

ファリサイ派の人は一生懸命に律法を学び、厳格に律法を守りました。そしてしてはならないことなどを細かく決めていきます。さらにそれを他の人に伝えるために学校を作ったり、父親が子どもに教えるように指導したりしました。また自分自身にも大変厳しく断食や献げ物も律法で決められた以上におこなっていました。彼らは決していい加減な人間ではなかったのです。

しかし神さまはファリサイ派を義とされませんでした。そこには二つの理由があります。まず彼は、自分自身にだけ頼っていたということです。彼の祈りを聞くと、彼は神さまに何も求めていないことに気づかされます。自分の力で断食し、自分の力で献金し、自分の力で正しい者になっているという自負は、裏返すと神さまなしに正しい者になれるという傲慢な思いでもあるのです。

一方徴税人は、自分が罪人であることを認めています。だから神さまの前に堂々と立つことができません。自分の罪深い姿を神さまの前にさらけ出すことができないのです。徴税人は、神さまの憐みに頼るしかありませんでした。神さまが彼に手を差し伸べてくださることを求めるしかなかったのです。

ファリサイ派が義とされなかったもう一つの理由は、そんな徴税人を見下し、彼の元に行かなかったことです。徴税人との間に壁を作ってしまい、手を差し伸べることをしませんでした。徴税人のために祈ることもなかったのです。

神さまを必要とせず、自分の力に頼った。自分とは違い罪深い徴税人とは、一切関わろうとしなかった。これが、ファリサイ派が義とされなかった理由です。そのファリサイ派の姿を示して、イエス様はわたしたちに語られます。あなたたちも、ファリサイ派と同じなのではないかと。

あなたは本当に神さまに全てを委ねているのか。自分の力で、自分を信じ、生きているのではないかと。またわたしたちの周りには、いろいろな方がおられます。その人たちのために祈るのではなく、ファリサイ派が徴税人にしたように蔑み、その人たちを受け入れようとしなかったら、わたしたちも神さまに義とはされないのです。

わたしたちは自分が神さまにより頼まなければ生きていけない存在であることを知り、助けを必要としている人のために祈り、手を差し伸べる者でありたいと思います。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/